

早稲田大学インクルーシブ教育学 会ニュースレター

2022年（令和4年度）

NO.3

学びのユニバーサルデザイン（UDL）実践研究 ～ UDL でやってみた・・・これでいい？ ～

第2回研修では、UDL を日本に広め、実践者の伴走を続けていらっしゃる NY 州スクールサイコロジストのバーンズ亀山静子氏を講師にお招きしました。インクル学会では毎年バーンズ先生をお招きし、UDL について学びを深めてきました。UDL は誰のため？何を見直す？等、基本的な考え方や「学習者を学びのエキスパートに」という目標について最初に全員で確認をしました。

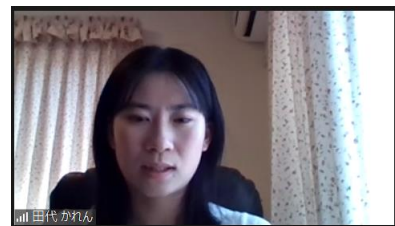
教師は自身の考える「学びやすさ」をもとに授業を進めてしまい、時としてできないことを学習者のせいにしてしまうことがあります。しかし、学習者の学習を阻んでいる「バリア」は何かという視点を持ち、学びにくい学習環境（授業）を変えて学びをサポートすることの重要性を改めてご指導いただきました。

また、UDL を実践しているお2人の先生が実践発表をしてくださいました。



国語科の読解指導に取り組んでいらっしゃる白杉亮先生は、読みのバリアを4点特定し、UDL ガイドラインと照らし合わせながら、ワードウォールの作成、ルーブリックの提示、学習オプションの提示等を行っていました。その結果、学習意欲に変化が出たり、学習のまとめとして書いた作文に読みの深さを感じられる内容が書かれていたりしていました。

田代かれん先生は、算数科の学習において「学習内容や時間の見通しや目標が見られない」「苦手意識や不安」というバリアを特定しました。教室に算数のワードウォールを掲示したり、毎時間ごとに児童が自身の学習について確認できるような工夫をしたりしました。その結果、子供たちはわからないことがあっても教室を見渡すとヒントがある安心感のもと学習に取り組み、自身の学習に自信をつけていくことが感じられた実践発表を行っていただきました。



後半は、自身の実践段階に分かれグループワークを行いました（2ページ目参照）。研修の最後には、Padlet を使用し、各グループで出た内容や学びについて共有しました。

学校に UDL 実践者がいなくても、一緒に学んでいく仲間が全国にいるので、助け合い、励まし合いながら UDL 実践を頑張っていきましょう！

「やってみたいができない原因を探る」段階

指導書に沿ってめあてを設定したら、文言の主語が教師になっていることに気付いた。ゴールの設定の妥当性を見直し、適切な評価方法を検討することが大切なことを指導していただいた。教師の評価活動が子ども達にとってバリアにならないように。

「MI 実践から UDL へ」段階

MI から UDL に繋がるヒントとして、ゴールと動機づけとの整合性をつけることが話し合われた。漠然としたゴールではなく、なぜそれを学ぶのが大切なのではないかといった意見がでていた。

「UDL 初心者」段階

少しずつ実践を試みている人が多く、ルーブリックやガイドラインの活かし方についての質問があった。また、「個別最適化のために UDL をやってみたい」という意見もあり、バリアを探り工夫することや、子供自身がチョイスし、少しでも成長を実感できるようにすることを再確認した。

「UDL 五合目」

自己調整、試行錯誤をする力を伸ばすための授業時間の確保が課題であり、主体的に学習に取り組む態度の評価の難しさもここにある。目標や方法の選択ができるようになるには、まず自分にとっての有益さを実感できるように様々な方法を経験する機会が必要であること。また、UDL の良さを子どもたちや職場に伝えていくための課題とアイデアについて情報交換をした。

ご参加の皆様からのアンケート(一部抜粋)

- ・UDL を校内で実現できない、のではなく実現するために今できることを実践し、その実践をどのようにブラッシュアップしていけばよいか。見落としている視点はないか、学び続けていきたいと考えました。
- ・学習者がよりよい学習者になるには、リフレクションが重要だと思います。また、データによる検証も必要かと思えます。それと同じように、実践者も自らの実践をリフレクションして、データによる検証ができるようにしていく必要性も感じました。
- ・それぞれの進度に従った方法を想定し、用意する大変さはありますが、それぞれの子供達の主体的な活動に則したポケットを用意しての展開は、支援教育には必要不可欠な内容であることを、改めて確認することができました。

第3回は、「インクルーシブ教育 令和4年度実践報告会」です。

9月25日(日)9:00～ たくさんのご参加をお待ちしております。